フィールドぶらり 6 「怒田」

超学際主義宣言

――地域に人をどう巻き込むか？

総合地球環境学研究所

フィールドぶらり　6　「怒田」

超学際主義宣言

――地域に人をどう巻き込むか？

総合地球環境学研究所

大豊町大平より怒田集落を眺める（ギャラリー夢来里にて）

氏原学さん（左）に、粉砕機の使い方を教わる石山俊さん（右）

大豊町では気象条件があえば雲海を見ることができる。（2017 年 9 月 30 日撮影）

はじめに

学問を学問たらしめるもの

本書は、高知県長岡郡大豊町怒田（ぬた）での経験をつうじて、地域社会への貢献や学術的な発見につながる、その発展段階を記録したものである。ここに、「超学際主義」のあとに「宣言」を付け足してタイトルにした所存がある。そのため本書の特徴、ユニークなところは、おのおのが決意表明し、その思いが書き綴られていることである。

超学際（transdisciplinarity）とは、disciplinarity（学問分野）に「trans」という「越えて」や「横切って」、「超越して」などの意味の接頭辞を加えて、異なる学問分野を横断するものであり、それと同時に、さまざまな学問を超えるものでもある。そのため、学問分野を超えて理解されるテーマやそのテーマに対してさまざまな分野の研究者が共に研究できることが望ましい。これは、平成26年度より継続して活動してきた「フィールドぶらり（通称ぶらフィ）」の目標の一つでもある「分野を横断する萌芽研究の発掘」とつうじる。さらに、超学際研究のアプローチでは、研究者以外のさまざまな人材を巻き込んで地域社会にとって価値ある活動で進めることが重要となる。つまり、超学際（transdisciplinarity）は、いかにさまざまな人々の知の統合を学問・地域社会の面で実践していくかが鍵となる。

次に副題の「巻き込む」というキーワードに触れておきたい。わたしは、ぶらフィをとおして、分野を超えて理解できるテーマを探していた。「篤農家」という言葉は、そんなときに石山俊さんから聞いた言葉だ（石山、２０１６、p.12）。地域には「篤農家以外にも、たとえば篤エネルギー家のように『篤○○家』がたくさんいて、そこにはさまざまな知恵があるんじゃないかな」と石山俊さんは言っていた。わたしは、地域に赴くと「篤○○家」を探すようになっていた。そのなかでサルトルの言葉を思い出す。

哲学者のサルトルは、巻き込まれという状況が自分を積極的にそこに巻き込むという、状況に対する受動性から能動性への転換（サルトル、２０１６、pp.13-14）を「アンガジュマン」として提唱する。わたしは、「アンガジュマン」が地域にとって重要な哲学（行動を促すきっかけ）であり、個人の主体性のメカニズムに興味をもった。そこでアンガジュマンの概念をもとにサントリー文化財団助成金の執筆を行なった。しかし、２０１７年４月に執筆した原稿を見ても、不完全さは否めない。その後、６月に２度（トヨタ財団と地球研）にわたって原稿を書き直し、そのやりとりの中で寺田匡宏さん（２０１７）の気づき、「巻き込まれ」（p.14）へとつながった。

さて、ここでわたしたちが超学際主義を宣言できるのも、本書で登場する氏原学さんや市川昌広さんの活動があってこそ成り立っている。

氏原学さんは２００６年に高知大学の事務職を早期退職して生家に戻る、いわばＵターン者。翌年には高知大学の教授陣や学生を巻き込んで、自主的な地域活動を開始する。その活動は、トヨタ財団の助成（２０１０年度と２０１４年度）で採択されることで、さまざまな企画の実践へとつながっていく。また、その活動の立役者のひとりが市川昌広さんである。市川昌広さんは２００９年に総合地球環境学研究所を退職し、高知大学農学部に赴任する。高知大学の地域と密接した堅実な活動は、２０１５年４月、新学部「地域協働学部」の申請が認められ、さらなる発展を遂げている。

忘れてはいけないのが、田畑勇太さんだ。田畑勇太さんは、高知大学で勉学に励むなか怒田集落での活動に参加する。その後、結婚と同時に夫婦で怒田集落に暮らすＩターン者。ＮＰＯ「ぬた守る会」を２０１７年2月に設立し、今後の活躍が期待されている。

気づきは学問を学問たらしめている根本であり、だからこそおもしろい。「巻き込む」というキーワードが意識化されることで、氏原学さんの活動やわたしの「アンガジュマン」の模索、そして、寺田匡宏さんの「巻き込まれ」の気づきによって、小さな点が太い線となってつながったように思える。わたしは、この点から線につながるプロセスこそ、記録すべき知の統合だと思っている。つまり、プロセスの記録こそ、学問の醍醐味ではないだろうか。

本書はこれまでのぶらフィの「座談形式による対話の記録」と異なる。各人の態度や振る舞いから今後の宣言が随所で示されていること、そして、ここでの知の統合の記録をとおして今後のわたしたちの活動を見定めてほしい、と宣言する。

三村　豊

参考文献
石山俊（２０１６）「『篤農家』を訪ねて」『Humanity & Nature Newsletter 地球研ニュース』総合地球環境学研究所研究基盤国際センター（RIHN Center）、第63号、p.12
J-P・サルトル著、伊吹武彦訳（２０１６）『実存主義とは何か』人文書院
寺田匡宏（２０１７）「援助の姿勢を考える」『Humanity & Nature Newsletter 地球研ニュース』総合地球環境学研究所研究基盤国際センター（RIHN Center）、第66号、p.14

目次

はじめに：学問を学問たらしめるもの　三村　豊

1　六人称の研究をめざして　石山　俊　8
一人称／二人称／三人称／六人称

2　巻き込み、巻き込まれる：「木を伐る男」氏原学さんと高知大学　市川昌広　12
氏原さんとの出会い
景色作りに人を巻き込む
木を伐る男の「かけひき」

3　地域の「ための」研究を模索する　三村　豊　18
「ぬた」のアクセント
素朴な疑問
地域の「ための」研究

4　ピンピンコロリが一番良い　田畑勇太　24

5 座談 棚田の風景を望みながら語る　氏原 学・田畑勇太・石山 俊・三村 豊　30
むらの記録を残すこと
記録から「持続可能な怒田集落」を考える
怒田から世界をつなぐ
6 「環社会」という態度　三村 豊　42
風土性における態度
態度のしくみ
「環社会」という態度のしくみ
あとがき：対話の記録から知の源泉の統合へ　三村 豊
著者プロフィール
7 Between Active and Passive　Masahiro Terada　i
Japanese Language and Environmental Subjectivity in the Epoch of the Anthropocene
1. The "I" Constructed Culturally and Linguistically
2. Who and What Made It?: Language and Ambiguous Japanese Environmental Subjectivity
3. Problem of the Voice of Middle
4. Lesson of the Environmental Subjectivity in the Epoch of the Anthropocene
能動／受動と環境主体性（日本語要旨）　寺田 匡宏

1 六人称の研究を目指して

石山　俊

一人称

文化人類学、アフリカ研究が専門と称する私であるが、実は農学部畜産学科を卒業している。なぜ農学部か。それは「人間、食べ物を作れることが重要だ」と考えたからだ。なぜ畜産か。「遊牧民に憧れていたから」という単純な理由からであった。結果はどうだったか。つまらなくてしょうがなかった。今思い返すと、私の知的好奇心が足りなかったことは確かであるが、実験という繊細な作業と実験データをもとにした細かな分析が性に合わなかったことも事実である。その反面、実習は嫌いではなかったし、毎年行っていた稲刈りの手伝いも好きな作業であった。

私が農学部に籍を置いたのは１９８０年代中盤から後半にかけての時期である。世間はいわゆるバブル真っ盛りで、都心では夜な夜な盛り上がっていたらしい。23区の片隅で、下宿（親戚が持っていたボロアパートにタダで住んでいた）、大学（研究室ではなく、探検部の部室）、それに山（縦走や沢登り）や川（ラフティング）が行動圏であった私にとって、バブルは無縁の世界であった。バブル的行為には興味がなかったし、当時は「かっこわるい」と思われていた農学部の学生がかかわるものとも考えていなかった。実はその頃、バイオ・テクノロジーブームが始まり、農芸化学学科だけは人気が上昇していた。

あれから30年、農業は時代の最先端に飛び出てしまった。遺伝子組み換え、アグリ・ビジネス、農業法人、環境保全型農業、グリーン・ツーリズム、農村の過疎化・高齢化、限界集落、良きにつけ悪しきにつけ、農業、農村に関する話題が毎日湧き出てくる。「ノケ女［注1］」などという言葉など、まったく考えもしなかったことだった。

二人称

大学を卒業後、植木屋、映画の撮影助手などのアルバイトで食いつないでいたが、１９９３年から97年まで、アフリカのチャド共和国でＮＧＯの現地調整員となった。その後大学院へ進学し、チャドでの調査を続けてきたが、ＮＧＯの職員であった頃とは違った興味が出現してきた。それは、人の生き方・生き様への関心である。その理由は調査の時に、多くの人にインタビューしたことにあると思っている。ＮＧＯ時代にも同様の関心がなかったでもないのだが、プロジェクトを「回してく」ために、個々の人の人生にまで気持ちが傾かなかったのかもしれない。

２００４年から２００８年まで、福井県の中山間地の農村に住むことになった。その理由は、私が「町の子」であるために、アフリカの農村、農民のことを理解できないのではないかというコンプレックスを打ち消すためである。古民家に住み、ＮＰＯの仕事をしながら、田んぼや畑を耕した（実はこれらもＮＰＯ事業の一環であった）。この時、集落に住むお母さん、お父さんたちにだいぶ助けてもらった。コメ作りや野菜づくりの技術にとどまらず、昔話、町へ出て行った子供の話、雪下ろし、沢庵づくりなど、それぞれの人生に蓄積された多くの知識、感情の深さと面白さに気がついた。

［注1］「ノケ女」は「農学系女子」を意味する。

三人称

チャド、福井の農村で、地域の個々の人々と向き合った経験を、どうしたら面白い研究に結びつけることができるか。つまり、私の経験を客観化できるかを考え始めたのはつい最近のことである。そこで考えたのが「篤農家」の研究である。実は、総合地球環境学研究所で、何人かの研究者と「篤農家」の話題で盛り上がっていたことがその基盤にある。「篤農家」研究は私の専売特許ではなく、研究仲間との共同作業である。

「どこどこに面白い人がいるよ」、私が篤農家研究をしていると知っている人は、たくさんの情報をもってきてくれる。それらのすべての人々にお会いすることは到底無理なことであるが、「篤農家」はどこにでもいることが分かってきた。「篤農家」の辞書的解釈は「農業に熱心な人」ということになっているが、私が考える「篤農家」とは、人生経験が豊かな人々だ。たとえば農業以外の仕事をしている（していた）人、考え方が非常にユニークな人、広いネットワークと深い知識から独自のやり方を考案する人。それぞれが持つ「篤農家」的側面は多様である。

「篤農家」が研究のキーワードであるが、「農」だけに固執しているわけではない。「漁」でもよいし、「林」でもよい。これが「篤農家」に括弧をつける理由である。第一次産業に携わりつつ、周囲に大きな影響を与えるのが「篤農家」であると考えている。

六人称

第六次産業という言葉が最近流行っている。生産、加工、販売を一体化し、生産者

がイニシアチブをとれるようにするのが産業の六次化の目的であるという。一次、二次、三次を加した、あるいは乗じた結果の六次化は、主に経済的側面からのアプローチであると私は考えている。ただ、その過程で、地域社会へのインパクト、携わる人々への精神的文化的インパクトも伴うものであると考えている。

では、先に述べた一人称、二人称、三人称、すなわち私の経験、チャドや福井での個々の人々とのコミュニケーション、そして「篤農家」の研究を加す、あるいは乗じる六人称の研究もありうるのではないだろうか。

「私」と「あなた」のやりとりの中から新しいものが見えてくることが六人称の研究の理想である。新しいものとは研究上の「発見」だけではない。研究をなりわいとしない人々も、それぞれの「発見」をすることが大切だと思う。「発見」は大げさなので、「ヒント」くらいの感覚でちょうどよいかもしれない。

どんな「ヒント」、どんな「発見」が怒田から湧いてくるのか。そのためには、「足しげく通わなければなあ」というプレッシャーを日々の仕事をしながら感じている。期待と不安が入り混じる。50歳を超えてこんなことを考えている私を、怒田の人生の大先輩たちはどう思うのであろうか。

2 巻き込み、巻き込こまれる：「木を伐る男」氏原学さんと高知大学

市川　昌広

「木を植えた男」（ジャン・ジオノ著）という物語がある。ひとりの初老の男が人も住まなくなった荒野に長年にわたって一本ずつ木を植えていく。30年余りが過ぎそこには広大な森林が戻り、人びとも再び暮らし始めるようになるという話しだ。怒田集落には氏原学さんという方が住んでいる。私は氏原さんの活動をみていて、彼は「木を伐る男」だと思う。

集落のなかで大きく育った杉や桧があると、その持ち主に伐採してもいいか掛けあう。許しがでると何人かの仲間を集めて伐っていく。木々は、かつて田畑だったところに、高齢で体が動かなくなった住民や都市へ出ていく住民によって植えられたものだ。育てば少しは収入になると期待されていた。何十年かたち木は大きく育ったが、今日では木材の値打ちはすっかりなくなった。逆に日陰をつくり、害獣の隠れ場となって厄介者あつかいされている。家屋は黒々とした高い杉や桧に埋もれ、隣の家や田畑も見えなくなっている。

親が汗水流し、苦労して植えた木を伐るには忍びないと、伐採を拒む住民が多い。それでも氏原さんは粘り強く、ことあるごとに伐採をお願いしている。杉や桧ばかりでない。集落にはびこり、幅をきかせている孟宗竹も伐る［写真1］。耕作放棄された田畑に茂る雑草木も刈って開墾する。集落内の田畑をできるだけ維持したいのだ。

「木を植えた男」は、（おそらく）伐採され荒野になってしまったところにかつての

［写真1］
孟宗竹（モウソウチク）を伐採中。竹は稲を干すはさ掛けに使う

森をとり戻そうとした。「木を伐る男」氏原さんもかつての景色をとり戻そうとしている。住民がまだたくさんいたころの田畑の広々とした景色である。

怒田では、今でこそおもに高齢者70人ほどが細々と暮らしているが、60年ほど前は３００人余りが住んでいた。木材を伐り出し、炭を焼き、蚕を飼い、米を作っていた。今日、集落まわりの黒々とした杉や桧の林のほとんどは田畑だった。移住を希望する人が現れても、田畑や道が荒れていては移り住むことはできない。そう氏原さんは言いながら、他人の杉や桧を伐り、他人の耕作放棄地の草木を刈り、耕している。

ふたりの男の違いは、「木を植えた男」はたった一人でひたすら木を植えたのに対して、氏原さんは高知大学の教員や学生をつぎつぎと巻き込んでいった点だ。

氏原さんとの出会い

私が怒田を初めて訪れ、氏原さんに会ったのは２００９年４月のことであった。高知大学に赴任し、ほどなくして怒田を訪れた。怒田へは谷底を走る国道から、急斜面についた道を上っていく。少し傾斜が緩やかになる中腹にいたると視界が開ける。標高４００～５００ｍの傾斜地に家々が建ち、棚田が広がる集落が形成されている。その背景には、谷を挟んだ対岸にいくつかの集落が点々としている。高知市から自動車でわずか一時間ほどの山の中に、今でもこうした景色を保ちながら営まれている暮らしがあることに強い感銘を受けた。ここで研究しようと最初の訪問で決めた。

私は、耕作放棄地が増えていることを説明する氏原さんに、畑仕事をするために放棄地を借りられるかを尋ねた。それまで私はマレーシアで農村研究をおこなってきた。そこでの調査は、村人の家に住まわしてもらい、彼らの仕事を手伝いながらおこなう。

怒田の暮らしの基本である農業を、真似事でもやってみることは私にとっては自然であった。私の問いに氏原さんは、学生で何か作物を作りたいのならいくらでも使ってかまわないと答える。氏原さんは、以前、高知大学の事務職として長年働いていて、退職後に生まれ育った怒田にUターンした。大学勤めの経験から、そんなことをするのは時間があり、もの好きな学生だと考えたようだ。学生ではなく、私がやりたい旨を伝えると、怪訝そうな顔をしながらも「いいですよ」という。

このように私は、怒田の人々が代々にわたって創りあげてきた景色と、それを維持したいという氏原さんの活動に巻き込まれた。その後、何回か怒田を訪れ、五月には放棄されていた小さな水田あとをあてがっていただいた。刈払い機で雑草木を刈り、耕耘機で耕すなど氏原さんの指導の下、開墾し、イモやカブ、葉菜などを植付けた。氏原さんは、私からのやや意外な申し出に答えて畑を提供してくれた。私もわずかながら氏原さんを巻き込んだことになったのかもしれない。

景色作りに人を巻き込む

その後も氏原さんには、私や私が連れていった学生がお世話になった。二年も過ぎるとだいぶ怒田集落にもなじみができてきた。当時、大豊町は現金収入源として薬草栽培の普及に力を入れ始めていた。ミシマサイコという薬草だが、発芽率が低いことや発芽後すぐに枯れてしまうことが課題になっていた。ひとりの四年生の学生が卒業研究としてその栽培を試してみたいという［写真2］。栽培実験なので一畝（一アール）もあれば十分だ。氏原さんに頼んでもうひとつ畑を借りることにした。

氏原さんの動きはいつも素早い。「では、ここで」とさっそく耕耘機を耕作放棄地に

［写真2］ミシマサイコを栽培する畑の準備中。奥が氏原さん

入れ、あれよという間に五畝ほどの畑を準備してしまった。私は当時、農学部に所属していたが、本格的な作物栽培にはほとんどなじみがなかった。条件さえ整えてやれば、うまく育つだろうくらいに考えていた。五畝がどのくらい広いのかもわかっていなかった。

ミシマサイコは成長が遅いうえに、薬草なので除草剤が使えない。手除草を夏場まで根気よくやらねばならない。九月ごろまでは大学での仕事の合間をぬって、週一回ほど怒田を訪れ、草引きを繰り返す。汗がしたたり落ち、へばる私を見て氏原さんは「農業もなかなか大変でしょう」とにやにやして言う。

氏原さんは、自身の目指す景色作りに人を巻き込んでいく。田畑は、流した汗の分に相応した景色となる。私や学生が流した汗がそれなりの景色をつくる。すると形成されたその景色がまた氏原さんを巻き込んでいく。

私は農学部の同僚の何人かに声をかけ怒田に誘った。さまざまな専門を持つ教員とその学生らが、いくつかの試みをすることになる。新たな稲作技術の導入、新たな生産物としてブルーベリー栽培の普及、小水力発電、放棄農地の雑草管理のためのヤギの導入などである[注1]。

木を伐る男の「かけひき」

おそらく、そのころから氏原さんの怒田での取り組み方も、少し変化してきたのではなかろうか。Uターンした当初、氏原さんは生まれ育った故郷の過疎・高齢化を目のあたりにした。住民たちは、これで怒田も終わりと集落の継続をあきらめた表情をしている。どうにかならぬものかと、高知大学で農村経済学を専門とする教員に相談

[注1] 怒田での高知大学による取り組みの概要については、市川・松本（2016）を参照。

をもちかけた。最初は、もし教員や学生が怒田を訪れて何か活動をしてもらえば、年寄りたちも少しは元気づくだろうくらいの気持ちだった。ところが、やる気のある学生や教員に逆に感化された。たんに年寄りを喜ばせるだけでなく、本気になって怒田の継続を考えるようになった。

怒田では、高齢だが体の動くおばちゃんたちが、細々とではあるが田畑を耕し、農産物を作っている。彼女らと生産者グループを作り、農産品を高知市の日曜市（街路市）で売るようになる［写真3］。大学と協働で助成財団から資金を得て、さらなる集落整備を進める。集落を越えた地域づくりを促す高知県の事業にも挑戦する。大学生もそれらに実習や卒業研究などでかかわっていく。

学生のなかには氏原さんの活動に興味を持ち、自主的に怒田に通い出す者が出てくる。学生団体を作りさらに積極的に活動しだす。彼らは耕作放棄地を開墾し、農作物を作る。さらにそれらを加工し、商品化して販売してみる。ここでも氏原さんの巻き込み、巻き込まれがみられる。若い学生との「かけひき」を心底楽しんでいる。

今では三年前に新設された地域協働学部の学生たちも実習で足しげく怒田に通っている。ここ数年の間に、学生のころから怒田に関わってきた三人が、卒業後に移住してきた。集落のかつての景色の再生を夢みた「木を伐る男」氏原さん。彼に巻き込まれた人が反応し、それが氏原さんを巻き込む。その繰り返し、すなわち巻き込み、巻き込まれ度合いの高まりが地域を活性化させていっている。

参考文献
ジャン・ジオノ（2015）『木を植えた男』あすなろ書房（Jean Giono. L'homme qui plantait des arbres.　寺岡襄訳）
市川昌広・松本美香編（2016）『「ニューズレターぬたた」の歩み』高知大学

［写真3］
日曜市に出店。毎週、学生が手伝いに来る。右から4人目が氏原さん

杉ノ大杉（特別天然記念物）。二株の大杉からなり、別名「夫婦杉」とも呼ばれている。

天然記念物
杉ノ大杉
賽銭

3 地域の「ための」研究を模索する

三村　豊

２０１６年７月、わたしは研究仲間の石山さんと寺田さんとともに、高知県長岡郡大豊町に訪れた。高知県に来たのはこのときがはじめてだった。

転勤がそこそこあった父だった。わたしは幼少期に暮らした名古屋での記憶があまりなく、その後引っ越した東京や千葉での暮らしが鮮明で、ひとまず実家がある千葉がわたしの故郷となっている。故郷を「ふるさと」と書くと少し馴染みがでてくるかもしれない。ただ、わたしにとっての「ふるさと」は地に足がついていない。幼少・少年時代の記憶はかなり薄れ、もしくは引っ越しによるものか、わたしのふるさと的な価値観はどこかおぼつかない。方言で話す人や地元の食べ物について話ができる人に会うと、「この人はひとつの大地の上にちゃんとふるさとがあるんだな」と思う。

さて、高知県の郷土料理のひとつが皿鉢（さわち）料理［写真1］。皿鉢料理は大皿に寿司や煮物、揚げ物などが盛り付けられ、「ハレ」の日の料理として振舞われる。わたしが言うことではないが、皿鉢料理は酒の肴としてよい。大食いのわたしがいても、数時間の談話にたえるほどのボリュームだ。はじめて訪れた高知視察の際に氏原学さん宅で皿鉢料理を食べる機会に恵まれた。その後、何度か高知県に訪れ、皿鉢料理を食べながら、「ふるさとに帰ってきたということはこういうことなのかな」と、ふと思う。

［写真1］皿鉢料理

「ぬた」のアクセント

「三村さん、正しくは『ぬ̄た』ではなくて『ぬ̄た』なんですよ」

ふるさとには食と同様に方言も欠かせない。

氏原学さんとの縁あって紹介してもらった田畑勇太さん［写真2］に「ぬた」のアクセントについて指摘された。はずかしいと思った。と同時に、怒田を少し身近に感じられて嬉しかった。

田畑勇太さんは高知大学を卒業後、２０１４年に怒田集落に夫婦で移住したＩターン者（写真2）。田畑勇太さん自身も最初は『ぬ̄た』と言っていたという。

日本の方言の研究はかなり豊富にある。東京と京都のアクセントが逆になることはよく知られている。東京では「橋」をハ̄シ、「箸」をハ̄シと発音し、一方京都では、「橋」をハ̄シ、「箸」をハシとなる（井上・木部、２０１７、p.134）。言葉のアクセントは、文字の上線が高くなり、それ以外が低くなっている。これは、東京式アクセントと近畿式アクセントの違いで、その境界は服部四郎によると愛知県の長島と三重県の桑名とされている（木部ほか、２０１４、pp.36-37）。愛知県東海市出身の田畑勇太さんと関東をふるさととするわたしは、どうやら東京式アクセントに属す。そのため、近畿式アクセントに属す高知県の発音と逆になっていたと思われる。東京式アクセントの『ぬ̄た』ではなくて、近畿式アクセントの『ぬ̄た』。忘れずに覚えておこう。

地域の言葉はじつに面白い。文献資料の表記に関しては、当時の識字率によって左右されやすい。しかし、発音はどうであろうか。口伝えによって残された『ぬ̄た』は、遠い過去の怒田集落の住民とアクセントという音の世界でつながれる。

［写真2］
田畑勇太さん

素朴な疑問

「怒田」と書いて、「ぬた」と読む。怒田表記の由来については定かではない。古くは、「布田」と記され、長宗我部地検帳[注1]で確認することができる（川村、１９５９、p.478）。長宗我部地検帳は天正15年（１５８７）から天正18年（１５９０）にほぼ完成し、土地所有や保有など豊臣政権期に長宗我部元親がおこなった土佐一国の総検地帳の記録である。「布田」表記については、豊永郷の記録が天正16年（１５８８）に完成しており、２０１８年の現在から４３０年前の資料まで遡ることができる。長宗我部地検帳の検地帳名には、郷、庄、文、村、名などたくさんの呼称で記載され、近世の太閤検地のような村制度で統一された検地帳とは異なる。しかしながら、大脇（１９６０）は「土佐における近世的行政地域の基礎づけが、この検地にあったと思われる。」（pp.38-39）と述べているように、中世の村落における地域単位から近世の藩政村への足がかりとして資料的価値は高い。

言わずもがな、長宗我部地検帳は現在の文字とは異なり、くずし字のため閲読には少々のスキルを有する。文字だけの確認であれば、『大豊町史　古代近世編』で「布田」の字を確認することができるため、ぜひ、調べてほしい。と、言うのも、大豊町史は大豊町ホームページで無料に参照することができ、上下巻合わせて２０００ページほどになる。よそ者のわたしでも容易に大豊町町民の豊かな暮らしを支える歴史や文化、政治、産業などの一端に触れることができる。

「なぜ、この地域は『怒田』と呼ばれるのですか？」と氏原学さんに問うたことがある。「この地域は地すべりが多く、土砂災害が多かったことで田んぼが怒っていることから」と氏原学さんは答えてくれた。

［注１］長宗我部地検帳の原本は、文化庁が運営する文化遺産オンライン（http://bunka.nii.ac.jp/index.php）によると高知県立歴史民俗資料館に保管されている。土佐七郡全域にわたる３６８冊が現存する。

大豊町は、断層運動により砕かれた岩石が一定幅の断層を形成していることや高知県のなかでもとくに多雨地帯なため、全国でも有数の地すべり地帯。地すべりについてもっとも古い記録は、安政元年（１８５４）の安政南海地震とされている（国土交通省四国地方整備局、２０１４、p.2）。

文献で遡ること４００年近く昔になると、事実を証明することはなかなか困難であるが、他方で、歴史を紐解く楽しさでもある。調査結果は一朝一夕にはいかない。現段階では原本の確認ができてなく不完全な結果となってしまったが、以下に問いと仮説としてまとめておきたい。

1．「布田」の由来はなにか？

「布田」の由来は、「山の斜面に布のように田が広がっていることから」ともされている（朝日新聞、２０１１、p.22）。しかしながら、「布のように田が広がる」という見立てに馴染めないところもある。当時の怒田集落は今と変わらずに棚田が拡がっていた［写真3］、その象徴としての「田」は予想できるが、「布」の字があてられたのはなぜだろうか。

わたしは楮（こうぞ）を材料とする「太布［注2］」から「布」の字があてられたのではないかと予想している。材料となる楮の栽培は、傾斜面の日当たりがよく、昼夜の寒暖差が大きいことで良質のものが育つ。怒田集落は良質な楮を栽培する環境条件と一致するため、かつては「布」の材料となる楮の産地があって、それに由来しているのではないか。「棚田と布が集落の資源」と思ってしまうのはすこし美しすぎるだろうか。

2．いつまで、「布田」と表記されていたのか？

「布田」と表記されていたのは、現在わかっている範囲で天正16年（１５８８）の長

［写真3］
棚田が拡がる怒田集落の風景

［注2］現在、楮から糸を紡ぐ技法は、徳島県那賀郡那賀町の「阿波太布製造技法保存伝承会」のみ太布織りが継承されている。

宗我部地検帳がもっとも古い資料である。ひとまず、それ以降の年代に作られた資料を探す必要がある。参照したい資料は、『元禄郷帳』、『寛保郷帳（御国七郡郷村牒もしくは土佐国七郡郷村帳）』、『天保郷帳』、『郷村高帳』、『地方行政区画便覧』などがあげられる。もうひとつは絵図である。上記の郷帳では絵図が上納されていることも多く、表記を探る手がかりとなるだろう。

まず、『元禄郷帳（１７００−１７０２）』は確認したい。『高知県の地名日本歴史地名体系40』によれば、「ぬた村」と表記されていた可能性がある（平凡社地方資料センター、１９９３、p.694）。また、同書の怒田村の解説欄で「土佐州郡志（１７０４−１７１１）」に、「奴田村」と記されていたとされる（平凡社地方資料センター、１９９３、p.235）。ただ、別の書籍では、「怒田村」とも書かれており、古文書を確認しなければならない。

以上、地名の由来と表記について思うところを整理した。仮説を立てることは研究を進める第一歩でもある。まだまだ研究・調査不足な点は否めないが、今後の研究課題として了承してほしい。

地域の「ための」研究

学術書とは、客観的な事実に基づいた研究成果をまとめたものだ。では、これまでのわたしの拙文はいかがなものか。「ぬた」のアクセントで言えば、『ぬ|た』と発声する方が大豊町にいることをわたしは知っている。出生場所や家族構成など詳しく調べていかなければならない。また、怒田の由来・表記についても、古文書は当て字が多いことや資料が残っていない場合が多い。わたしの問いや仮説が証明できる可能性は

限りなく低いだろう。だが、ここに「地域の研究」から「地域の『ための』研究」へ込めた思いがある。

冒頭で述べたように、わたしには「ふるさと」と呼べる場所がない。そのためか、地域の研究を通して、「ふるさととはなにか」を知りたいと思っている。また、都市の研究を行なっていたことも関係して、わたしの目的は地域で研究できる「もの」を探していたのかもしれない。しかしながら、その「もの」は誰のための研究であろうか。自分の研究成果として成立しても、地域にとってはまったく興味がないことが、研究ではよくあることだ。つまり、わたしのためでもあり、地域のためでもあること。だからこそ、「怒田」表記の理解が、わたしと地域をつなぐ研究であると願いたい。「地域の『ための』研究」とは、研究のプロセスから成果までが地域にとって価値を高めるものでなければならない。結果的に、地域のための研究になることはある。ただ、地域で活動するための振る舞いや態度として、「ための」を常に忘れないように心がけたいと思う。これがわたしの超学際主義の宣言である。

参考文献

朝日新聞「大豊町怒田地区かいわい　棚田の里、若い息吹／高知県」２０１１年４月12日付朝刊、p.22

井上史雄、木部暢子編著（２０１７）『はじめて学ぶ方言学　ことばの多様性をとらえる28章』ミネルヴァ書房

大豊町史編纂委員会（１９７４）『大豊町史　古代近世編』大豊町教育委員会 http://www.town.otoyo.kochi.jp/dl/dtl.php?k=4&i=1（２０１７－１０－30）

大脇保彦（１９６０）「土佐における近世初期村落について－長宗我部地検帳による若干の考察」人文地理、12巻3号、pp.223-245

川村源七（１９５９）『長宗我部地検張　長岡郡　下』高知県図書館

木部暢子、竹田晃子、田中ゆかり、日高水穂、三井はるみ編著（２０１４）『方言学入門』三省堂

四国地方整備局事業評価監視委員会（２０１４）「怒田・八畝地区直轄地すべり対策事業　事業再評価」国土交通省　四国地方整備局、pp.1-46、http://www.skr.mlit.go.jp/kokai/project_evaluation/h26/2nd/pdf/07.pdf（２０１８－２－６）

竹内理三編（１９８６）『角川日本地名大辞典39高知県』角川書店

平凡社地方資料センター編（１９９３）『高知県の地名日本歴史地名体系40』平凡社

4 ピンピンコロリが一番良い

田畑　勇太

私は平成26年の4月に高知県大豊町の怒田集落という集落に移り住みました。高知県に大学入学を機に移り住んで5年が経った年でした。怒田集落はいわゆる限界集落です。65歳以上の人は過半数を優に超えています。何故そのような集落に当時24歳だった若者が移り住んだのか。様々な条件が重なり、理由を挙げればきりが無いですが、端的に言えば縁があったからです。

大学時代、地域経済を実体験として学ぶため度々訪れていたのが怒田集落でした。結局怒田集落での経験、そして感動が心から離れず、学生から農業従事者と立場を変え、住むことを決意しました。若気の至りといえば聞こえが悪いですが、今振り返ると何か直感的に幸せの匂いを嗅ぎ付けての決断だったのではないかと思います。その直感は早くも形に表れます。移住して2ヶ月が経った6月14日、集落総出の結婚式を開いて頂きました。まだ集落に入って名前も一致せず、方言が強すぎて何を言ってるかもわからず、適当に笑ってしかいなかったです。若者夫婦をまるで自分達の孫の晴れ姿のように祝ってくれる姿を見て、心が温かいもので満たされていく感覚を覚えました。

そこでお祝いの挨拶して頂いたのが川﨑福太郎さん。私は怒田集落での農業の仕方、生活の仕方はほとんど福太郎さんから教えて頂きました。年齢は60歳近く離れていますが、一緒に仕事をしてもその年齢差は感じず、パワフルさに圧倒されました。仕事

息子のお披露目会で泣かれる福太郎さん。子供がとても好きだった。

が大好きでよく自分はマグロと同じで止まったら死ぬのだと笑っていました。その福太郎さんにインタビューを受けていただきました。

――死ぬまで働くということに関してどう思いますか。

結局皆がそうだと思うけど、目的は何歳までということはないはね。動ける範囲で体の続く限りやるということよね。ここらのもんは。ひまわり乳業［注1］に出している人（契約栽培をしている人）は忙しそうにしている。種を蒔いて、それかひまわり乳業から苗をもらって、作れば、まぁそれを生きがいっていうか、結局生きがいになるわね。草刈りよね。みんなが。

――都会の高齢者は草がないから仕事がない、という話を聞きましたがどうですか。

必ずしも仕事がないから健康でいられるもんではない。

――死ぬまで働くということに関してどう思いますか。

死ぬまで働くことに対して別に抵抗はないはね。どうしても、しなくてはいけないということでやっているのではない。しなくてもいいんだから。子供が（仕事を）するなするなというけれど、じっとすることができないからやっているだけ。その代わ

［注1］怒田集落ではひまわり乳業と契約して青汁（菜食健美）用のケールなどを栽培している。

り考えたら、ある程度動いたら体は丈夫で良い。ただここで寝ていたら食うものも美味くないし、お腹も空かんし、みんなもそんな感じでやっているんじゃないか。動きたいのよ昔からやってるけん。

――福太郎さんが入院した時、畑の夢を見たと言っていましたが。

夢に出てきたのはここら周囲の畑。うんと夢にでてきたのよ。それぐらい百姓に執着している。動かないといけない体になっているから、鬱みたいになっていた。

我々の話を街の人に話しても通じない。同じ百姓でも平野部の百姓と山の百姓は全然違う。平野部でも若者は百姓を嫌う。好きなものは別として。

――死ぬまで働くために必要なことは何ですか。

死ぬまで働くというか動ける範囲で働く。ピンピンコロリが一番良い。問題は健康よ。今のところは無理はしてないけど、草刈り機少し使うぐらいで。短時間で今年（野菜を）作らなかったところも刈ったのよ。あんまり荒らしとったら自分が五月蝿いは。

――後はありますか。

人に頼るっていったらおかしいけど、今度も学くんが稲を刈りにいくというから、頼んではなかったけど、来てくれるというので有り難いと思ってお願いした。ちょうど昨日奥さんを連れて市内に行っていた。そんなもんで自分一人では、ここの夫婦二

お茶を炒る作業。木べらでかき回すため大量の汗が吹き出る。

人だけではとてもじゃない、子供もちょくちょく戻るけど地域の人の助けがあって、自分ひとりでやるっていってもとてもじゃない。去年みたいに悪かったら、去年もみんなにやってもらったんじゃけん。自分はできなかったんだから。今年はなんとか動ける。8時間ぶっ通しはできないけど、街から比べたら、高齢化になっているのは辛いところだけど、生活するには最高のところよ。戸締りをしなくても良い。人間関係も、街にいたら人によったら迂闊に話しかけられない。

――怒田集落の人は元気に働いていると思います。

森和子さんが言っていた。とにかく動かなくていけない。

娘さんが（あまりに福太郎さんが言うことを聞かないので）草刈り機を担いだまま死んだらいいと冗談を言われた。自分はそうは思ってないけど、それぐらいの生きがいをもってやらないと実際はできない。人それぞれだから一概には言えないけど、我々はそこそこ動ければ、引っ込んではいられない。

自分の考えでは、前から言っているけど、病気になってみんなに世話になって、そこそこの体力が保てたら、地域のもんにも恩返しできるように、道役［注2］にも出られる範囲で出れるように、人の邪魔にならないような状態なら一緒に、我々より高齢の人もいるのだから。そういう気持ちではいる。

――定年から死ぬまで20年以上あるが、どうしたらいいと思うか。

人間による、ふらりふらりするのが好きなのもある。ひまわりでお金を儲けるのは

インタビュー中、愛おしそうに集落を見つめる福太郎さん。

［注2］怒田集落では年に1回、町民総出で道役（道路の草刈り、山道など通行できるように補修）を行っている。最近は高知大学の学生にも手伝ってもらい、集落の維持に努めている。

全然違う。生きがいっていったら、元気でそこそこの百姓ができて、地域の人とも付き合って、子、孫、ひ孫と会って、生活できれば最高よ。

怒田集落に移住してきて一番驚いたのが老人たちの働き方です。今まで持っていた老後のイメージが崩れ去りました。早朝から80歳のおばあちゃんが刈払い機を使う音が鳴り響き、75歳のおじいちゃんはチェーンソーで木を切り倒す、90歳を超えたおばあちゃんも運搬機を巧みに使い大学生でも息が切れる坂道を颯爽と登っていく。そんな姿を見ていると新聞やテレビを埋め尽くす働き方改革や、増加するニートといった社会問題との差に戸惑い、何が正しいかわからなくなってきます。しかし実際に怒田集落の住民は死ぬまで働きます。

そのエネルギーはどこからくるのか。そして、それは何なのか。今回の福太郎さんへのインタビューでその答えに少し近づいたのではないかと感じます。働くことに少しの苦痛も感じず、仕事をすることが夢に出てくる福太郎さんの中では生活の一部、もしくは人生の一部として仕事が存在し、生きる意味となっているのだと感じました。働くということに対しての価値観は様々だと思いますが、ここまで熱望し続けることができる人生も素晴らしいものだと思います。この価値観を持った生き方を現在の単調化した働き方に投じることができれば、多様性を生み出すことができるのではないかと考えます。

（2017年6月19日川﨑福太郎さん宅にて）

定福寺の豊永郷歴史民俗資料館へ向かうところ。資料館には、民具が約 12,000 点収蔵されている。

5 座談　棚田の風景を望みながら語る

氏原　学・田畑　勇太・石山　俊・三村　豊

むらの記録を残すこと

氏原　怒田部落のあるおばあちゃんが、「もういらんき、焼く」って言いよったのを、たまたま居合わせた若いしが、それは何か珍しいものかと思ってもらってきたんだって。だけど、中身見ても読めんから氏原さんにって持ってこられたのよ。それがこの古い文字で書かれているもの［写真1］。今まさに山奥はこういう状態がいっぱいあると思う［写真2］。

石山　これを持っていた方はまだご存命なんですね。

氏原　もう90歳くらいになる。

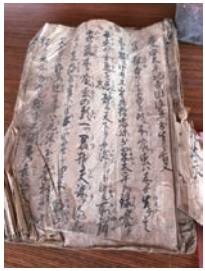
石山　全部読めない。

三村　日記だったら日にちが書いてあって、年貢とかだったら名前も書いてあるかも。

氏原　これ、薬じゃないのかな。薬屋さんが預けていったんやないの。これ、立野（たづの）村ってあるから、あの向こうですけど。何て書いてるか読めんわ。薬なんかじゃったら、ますます読めんわな（笑）。

三村　いま読めなくても、残しとけばどこかで役に立つかもしれないですね。

石山　生きた情報ですもんね。もしかすると誰かどっかから落ちてけがをしたとか書かれているかも。



［写真1］
氏原さんに届けられた古文書

［写真2］
氏原さんが指差した風景の様子

氏原　これから先を考えたときに、例えば土地の所有者が相続してないために2代も3代も前になるんですよ。田畑くんは当然なんだけど、僕でさえも知らない人がいっぱいいるわけよね。ところが、その人の情報を得る方法っていったら、東豊永の役場が焼けてたために残ってないのよ、あんまり。

石山　戸籍がね。

氏原　ましてや、個人情報だから取れないわけ。そうなると、昔のこういった記録を残しておけば、突然その人の名前が出てきて調べられるかもしれないよね。今回、昭和6年の青年団の広報誌が1冊見つかって手に入れてるんです。そこに当時の青年の名前がいっぱいある。ほしたら、前に僕が戦争のことを書いた人の名前とひっつくわけよ。そういうふうにして全部ひっつけていって、例えば、ここの土地が「誰々べえ」って書いちゅうけど、その人の情報はここにあるよみたいな感じになって、手がかりがつかめるとかいうことになるんじゃないかなと。

石山　断片的でも、そういうのがあるとね。まるっきりわかんないよりは。

氏原　記録をきちっと取っておくっていうことが本当に必要になってきたなって。田畑くんとぼくとはここで生きるこれからの時間が違うので、どうしても考えていくことが違うから、イコールにはならないんだけど、文化や歴史の掘り起こしに興味がある。いろいろ大豊町を駆け巡ってるんだけれども、そういう中でやっぱり思っているのは、文字として地域を記録に残す。今の地域がどうなのかをちゃんと分析したものを残しといてもらいたいと。どれほど価値があるものなのかわからないけれども、そこはやっぱり記録として残る。そういう作業をしないといけない時期かなぁと思って。

三村　よそ者のぼくらは文字で残すことが重要と、市川先生と話しました。

氏原　それこそ田畑くんが使う公民館［写真3］の片づけしたときに、昭和16年の部落の議事録が出てきたのよ。残念ながら連続した議事録でないのよ。残念なんだけど。これを見たときに、怒田だけではなくて、消滅しかかってる集落でも、戦前戦後を通じて、それぞれ部落自治をやってたわけだから、何らかの書類が残っていて、それがちゃんと引き継がれずに、まさにちり箱になりかけてる。町のほうにも呼びかけて、一度喚起して集めてみようかなって思ってるんです。それが50年とか１００年っていう時間が経ったときに、新たな価値を生み出してると思うんで、そこを何とかしてほしくて。石山さんや三村さんは頻繁に来れるわけじゃないから、ちょっと意識的にできないかなって思ってるんです。

石山　過去の記録をちゃんとアーカイブとして保存するのは重要ですね。

氏原　ぼくは怒田でいろいろとやろうとしたら、あと5年ぐらいはまだ元気かな。5年間で何ができるかって考えちゃうわけよ。ぼくは田畑くんの考えと全然違う。ほんで、この5年間に次何するかって、もう自分のステップを決めている。ただ問題の一つは、ぼくの場合はパートナーの膝がちょっと悪くなって、調子も良くなくて、ストレスもたまってるんよ。だから、今までみたいに走りまくるっていうのにだいぶブレーキがかかるかなって思いながら考えてるんだけど。次のステップとして考えてんのは、田畑くんが来て、市田さんが来て、ほかにも何カ所かＩターン者が来る。時折、Ｉターンしたい人が来るっていうふうなことを考えたときに、この人たちをどう定着させるか。ほんで、定着させるときに考えてんのは、この地区に集落活動センターを作って、この地域全体を動かす器を用意するってことと、もう一つは、この器の中にいかに新しい感覚を入れ込めるか。今までは、例えば、怒田っていう集落の中で古い価値観と新しい価値観、古い人と新しい人って言ってもいいんだけれども、ぶつかり合いなが

［写真3］
怒田集落にある元公民館。田畑さんはクラウド・ファンディングを活用して、囲炉裏のあるオフィスとして地域住民が利用できる場所をつくろうとしている。

らここで調整を取りながらやってこれている。だけど、これをもう一つ広げたい。だから、東豊永地区という枠組みの中でIターン者が来ても、新しい価値観がきても、それを受け入れる。来た人を定着させるっていう意味で考えているのが、林業関係でやりたいっていう人がほかの地域に何人かいるのよ。この人たちが実は路頭に迷ってる状態なので、何とかこいつらを一つにして、大豊なら大豊地区で仕事を探してきて、ここに定着させる手を考えるかな。

三村　たくさんの中山間地域を見てきましたが、林業はどこでも抱えている問題ですね。

氏原　難しいんだけれども、今伐採しないとどうしようもない木ばっかしなわけよね、実態としては。だから、多少、地権者にお金がそんなに入らなくても、１本１０００円ぐらいでもいいから、ともかく売ってくださいと。ほんで、林業をやりたいＩターン者が切って出す。そのときに日当が１万円でも出せるようなシステムをどうしてもここで考えてやらないと。林業やりたいって彼らがここへ来ても誰も山をさわらしてくれないし、ましてや仲間もできないわけ。そのためには、地域にいつまでも人が住んで、コミュニティがある環境をどうやって作るかっていうことに協力してもらわにゃいかん、みんなが。ぼくがたまたまここに住んでいて、Ｕターンしたんだけれども、それでも「怒田のあそこにおった氏原よ」って言えば、「そうやねえ」という話が通じるわけだから。ぼくの持っている経験なり育ちを、そういった環境をうまく使って、何か役割果たしたらいいかなって思ってる。

石山　それができるのは今の氏原さんの年齢と経験と、ここ出身であるってことを最大限に。

氏原　まず出身であるってことですね。

石山　それをよその人がやってもあれでしょう。

氏原　田畑くんのように実際にここで生活する、この地域での生活にチャレンジしてくれる人間が出てくるっていうところで言うと、私に対する周りの評価は高いわけよね。だから、それは非常に大きな力になってるわけよね、何をするにしても。

記録から「持続可能な怒田集落」を考える

田畑　ぼくは基本的に怒田を持続させることしかあんまり考えてないので、そこを一つの大きな目的にしてもらえれば、それにすべてつなげていく。

石山　例えば、20歳ぐらいの学生が来て、いきなり人の話を聞いて、もっともらしいことをする、やっぱりそれは無理だと思うんですね。ただ、彼らの素直な感想ってすごい大事だと思うし。そこにぼくらがお手伝いできるとか。映像なり文章を読んでもらって、そうだとか、でもそこは違う、こいつらはまだわかってないだとか。

田畑　いや、わかってないと言っちゃ、ちょっと終わっちゃうような気がするんですけど。

一同　（笑）

石山　「持続」ってすごい難しいなぁと思うんですけど、例えば人が住んでいれば持続なのか、農業が続けていけば持続なのか。田畑さんがここで亡くなって誰もいなくなって、でも、記録が残れば、それも持続の一種かなとか、いろいろ考えちゃいますけど。

田畑　ぼくはやっぱり価値を生み出し続けることかなと思ってるんです。ずっと長く続いている会社って、体制とかいろいろ変わってると思うんです。

石山　組織の体制が変わって、もしくは社会の仕組みも変わっていく。あと、文化と

か祭りとかも変わるじゃないですか。変わるのが当たり前なことだと思うし。誰が起点になって、どれがどういうふうに変わったのかみたいな。そういうのにすごい興味があります。

田畑　持続させるためには、過去も含めた価値、この集落の価値をもう一回掘り起こす、再発見すること。そして、もう一つ、新しい価値を創造していくことだと思ってるんです。ここが存続する意味になると思うんですよ。研究とかって、ある程度長いスパンやって成果がわかる。でも、ここって、あと20年ぐらいで。

三村　むらの存続を想うと。

田畑　やっぱりなくなってもいいからっていうわけではなく、持続させることはまず最低のところであって、それからまた20年もてばいいってわけでもないので。だから、何を残していったらいいのか。ただ畑とか田んぼがあればいいのか。人がいればいいのか。文化は廃れていいのか。何を自分たちは残したいんだろうか。何を後世に伝えたいのか、なかなかぼくも言葉にできない。ここに価値があるのはわかっているんですけど、それをちゃんと言語化したり、わかるように伝えていきたい。逆に言えば、価値を見いだしていかないと滅びていく。しかも、今ある価値だけじゃなくて、新しい価値を生み出すっていうのが、それはまた学生にも手伝ってもらったり。

むらに必要な「地域の教育力」

氏原　ぼくは大学の職員やっていたから、ずっと考えてたのが、大学が地域に入ることによる効果っていうよりも、地域の教育力。地域の教育力って何だろうっていうのが大きな課題で。高知大学とのかかわりを見る中で、地域の教育力ってどうやってレ

ベルアップできるのか。あるいは、それって何だろうみたいなところを、ちょっとでもいいから探ってもらって、地域と大学に返してもらいたいってのがあるのです。大学側、市川先生は社会学やってるから、基本的に自分のフィールドとしても地域を見ることができるけど、例えば都市経済になると全然興味ないわけよね。大学には地域を見るんではなくて、やっぱり地域の教育力をどう向上させるかっていう使命をきちっと担ってほしい。教育者としての役割を学生だけではなくて、やっぱり地域をどうやって変えていくのかというところで発揮してほしい。ぼくらが国民のために開かれた大学像とかいろいろ議論したときは、そういう問題をよく話したんだけれども、やっぱりそこを何とかできないかなと思うんです。

石山　市川さんに話を伺って、高知大学の地域協働学部は一番上の学年がまだ3年生なんですよね。1年生で地域に活動するカリキュラムがあるみたいですよね。で、3年目でその地域の問題を自分で見つけて解決策を提示するみたいな。

三村　必修の授業で。

石山　ただ、カリキュラム的にはそうなってんだけど。

三村　必修科目という難しさがあるって言ってました。以前は、別の学部で選択科目だから、ある程度モチベーションがある学生が参加してたけど、必修になるとやる気がどこまでか、見えにくくなってと言ってて。単位取らないといけないから来てるような子も含めて、地域に入れてしまってどうなってるのかなって、心配だっていうふうに。

石山　だから、それがどういうインパクトになっていくかっていうのをやっぱり。教育っていう面ではいいと思うんですけど、成果還元っていう面では、ちょっと確かじゃないですよね。

三村　大学にもメリットがあって、地域にも波及する効果が見込めればいいですよね。

氏原　そうですよね。毎年、成果報告会を地域でやってもらうのを継続している。ここにはいろんな方がやってくるから。成果報告会はこれで6年目ぐらい。実は大学側が皆さんみたいに若い世代にどんどんなってくる。そうなると、多くの人が都会育ち。だから、こういうローカルへ入ってきたときの身の処し方っていうの、本当に学生とおんなじよね。（笑）。

三村　この前あった上柿佳菜さんのほうが全然先輩です［写真4］。確か、大阪の吹田出身で、ここでいろいろと頑張っているので、もう先生ですよ、僕からしたら（笑）。

氏原　学生を入れることによって地域を若返らすとか、いろいろなことがいわれるんだけれども、大学が本当に長期的な展望を持ってやると考えれば、どうしても地域に教育力を持たさないと学生を安心して預けれないわけですから、なかなか議論をしにくいんだけれども、どうしてもやらないといけない。高知は特に地域の教育力が弱いって言われてるところだから。例えば、似たような地域でぼくが行った場所で言うと、岩手とか福島では大学を地域に受け入れる体制が、行政含めて県全体で体制ができているところだから、非常に入り方も多様で。その点、こっちはだめやなと思ってる。

三村　それは多分、お互いに巻き込んでいくような仕組み。短い間でもお互いにとっていい関係が築けるんであれば、地域の教育力や地域のビジョンが、実は学生も学ばしてもらえて、そこから吸収していくっていう。

石山　そういうきっかけ作りも含めて、一緒に打ち解けていって話ができる。多分、怒田でも全員がそういうのが得意な人じゃないですよね。だから、苦痛な人につき合ってもらうのもあれだし、かといって、毎回、じゃあ、氏原さんと田畑さんかっていうと、2人の教育力は上がっても、地域の全体としてね。そういうの、やっぱ、どこ行っ

［写真4］
高知市で開催されている日曜市の様子。集落で取れた野菜やお米を販売している。
氏原さん（右）、上柿さん（中央）、田畑さん（右から3人目）。

ても感じるし。

氏原　田畑くんがおるときに取材（笑）。

石山　かといって、僕らも不安定な身分だから、あと10年研究できるかどうかって実はわかんないんですよ。

氏原　頑張ってここでペーパー書いて就職して、早う（笑）。高知へ就職してくれてええけん（笑）。

怒田から世界をつなぐ

氏原　高知大の理学部の学生にサルの調査［写真5］をずっとやってもらってるんですけど。今までサルの話をしても、みんなあきらめてたんだけど、雰囲気が変わってきたね。やっぱり何とかしないといけないっていう。だから、地道やけど、そういう活動を地域の中に入れることによって変化が生まれるっていうのが見えてくるね、そういうところではね。

田畑　地域にとって、学生が来てくれるだけで価値はある。ぼくらにとっても新しい価値をどんどん教えてくれるので。

石山　学生さんに過度な期待をしても彼らも負担だろうし、無理だろうし。でも、若い人が来て何かやるっていうのは悪くないですよね。

田畑　例えば、ぽろって言う言葉。何でこのおじいちゃん、おばあちゃんたちはこんなに年を取ってるのに働いてるの？っていう素朴なことが、ここにずっといると忘れていってしまう。こういうもんだっていうふうに思ってしまうので。ぼくが言ってることとかが、世間からずれてるっていうのを、指摘じゃないですけど、世間ではこう

［写真5］
2018年2月19日（月）に行われた「高知大学活動報告会」の様子。写真はニホンザルによる農業被害について報告している。

考えられてるよっていうのを言ってもらうだけでも、すごくありがたいし。

石山　ここに来て、それがきっかけになって、次の道を歩むなり、違うことを考えるなりってのがすごく面白いですよね。

三村　本当は地域だけじゃなくて、広く見なければならない。例えば、学生がここに来たことで、ここととの関係が途絶えていても、卒業後の仕事場であったりとか、ほかの場所で変化が起こってないかとか。

石山　怒田で経験した学生のその後の話を聞いてみたいよね。できればいいなと思うんだけど。

三村　ぼくらはそっちをやらないといけないかなって思って。

田畑　高知大を卒業した学生が、トマト農家に就職している。うちでトマトをやって、そのままトマト農家に。

石山　それは高知のほうですか。

田畑　神戸の淡路島。怒田のことだけ考えても意味がないので、怒田を守るってことが、草の根活動じゃないですけど小さな革命。一番小さなところの革命を起こしていくことで全体に広げていくっていうことが大事なのかな。

石山　こういう過疎と高齢化の集落って日本全国にあって、怒田でのかかわりがきっかけになって、違うとこ行っても同じような価値が共有できる。

田畑　それは最終的な目標に。

石山　それが日本を越えて世界に広がったら、もっとすごい面白いけど。

三村　過疎地域の問題で言われているのはネットワーク過疎、最近は関係人口とも呼ばれているかな。つまり、人とのつながりがないから過疎地が大変だっていう。それはいろんなところで言えることで、家族や友達と会ったりとか、知り合いとつながっ

ていることで、暮らしの豊かさが変わる。

田畑　これからどういう変化が起こっていくのか。学生とよく話すんですけど、やっぱりその子らが新しい世界を作ってるわけで、そのまた次がどんどん出てくる。だから、そこに僕たちの価値、これまでの価値をはめていって、どうしたらここがそれに対応できるような仕組みになっていくかっていうところに興味があるところです。

（2017年11月27日　氏原学さん宅にて）

農作業を手伝い、「よもやま話」から地域の暮らしに関する知恵を伺う市川さんと石山さん。

高知大学活動報告会では、約 30 名近くが参加し、活発な意見交換が行われている。

6「環社会」という態度

三村　豊

最近の出来事を話したい。

わたしは京都市北区の紫野で暮らしている。家の近くには大徳寺があり、そこには千利休自害の原因とされる山門がある。仕事の関係で関東から京都へ移ってきたころから、一度は町家に住んでみたいと思っていた。そこで、昭和初期（厳密には建設年代がわからず、もっと古い可能性がある）に建てられた、平屋の町家を借りた。町家の向かいは真新しい住宅が建ち並ぶ。先日、こんなやりとりがあった。

わたしは玄関を開ける。その先には軒先でタバコを吸っている主人がいた。いつものように挨拶を交わす。と同時に、風景の違いに気がつく。主人の家は落下防止のため足場が組まれ、外観がネットで覆われていた。「結構大掛かりですね。なにの工事ですか」と、今日は珍しくバスの時刻まで時間があったので問いかけた。主人は、「朝からうるさくてすみませんね」と。会話はそこで終わりそうだった。「いえいえ、まったくうるさくないですよ。工事が気になったので」と焦りながら会話をつなげた。「家の修理なんですよ」と主人がいい、「そうですか」と言ってその場を離れた。

お気づきだろうか。雑談のつもりで聞いた「結構大掛かりですね」という問いかけに、主人は気分を害してしまったのかもしれない。いわゆる京都ならではの「いけず」な態度と捉えたのだろう。「いけず」は京都を中心に広がる方言で、「いじわる」という

意味になる。「結構大掛かりですね」には、「結構大掛かり（な工事でうるさい）ですね」という具合に婉曲した表現として理解されたと思われる。わたしとしては決して「いけず」をしたつもりはない。もちろん、主人は日々のうしろめたい気持ちから相手を想って、謝罪をしたのかもしれない。ただ、わたしは逆の立場なら普通に工事内容を説明していただろう。鈍感なだけかもしれないが、コミュニケーションとは難しいものだ。

風土性における態度

これは、和辻がいう「風土性」につうじる。和辻の風土性は、「人間存在の構造契機としての風土性」（和辻、２０１５、p.3）を明らかにすることで、さまざまな「人間の在り方」を見ようとしたのである（小坂、１９８３年、p.97）。さらに、和辻は人が存在する局面において、個と対象の関係に生じる現象に着目していた。いわゆる「間柄」という言葉である。和辻は、自然環境（土地の気候や気象、地形、景観など）の風土だけではなく、「間柄」による自己客体化や主体的な人間存在にかかわる現象を風土性として捉えていた。そのため、風土性が見られる現象には、芸術や風習、宗教などのあらゆる人間活動のなかで見いだすことができる。

しかしながら、和辻の風土は１９２８年から１９２９年の講義を草案としており、今日の社会状況とはだいぶ異なってきている。わたしのように京都で暮らすことで、「いけず」と直面したように、風土性における間柄は、一層複雑になっているだろう。「いけず」とは風土による態度の現れでもあり、「間柄」のなかには、さまざまな個の「態度」があると思われる。

態度のしくみ

そこで、個の態度とはいったいどのようなものか整理する必要がある。態度は、岩淵・田中（１９７８）の研究によると下記のように整理することができる。

1. 態度は反応のための先有傾向（準備体制）である
2. 態度は常に対象を持つ
3. 態度は主体―客体関係による同期的・情緒的性質を持つ
4. 態度はいったん形成されると持続的である
5. 態度は学習されたものである
6. 態度は互いに関連し、構造を形成する

態度とは、個人の経験・学習やそこで育まれた人との関わり合いが体系化され、ある状況に対する反応の準備体制といえる。換言すれば、態度は「間柄」という現象に直面した際に生じる、個が判断する行動への身構えといえる。

「環社会」という態度の仕組み

ここで、冒頭の出来事で書いた、わたしと主人の間柄に見る態度の現れを整理していきたい。主人の態度には二つの身構えが生じていたと考えている。ひとつは、「いけず」に見られたように、京都という慣習によるもので、これは「風土的な態度」とい

えよう。もうひとつが、近隣住民への騒音による「うしろめたい」気持ちで、「規範的な態度」といえる。これは地域性にかかわらずどこでも経験することができ、誰にでも形成されるものである。主人はこの二つの想いが重なり、謝罪という決断をして態度で示した。

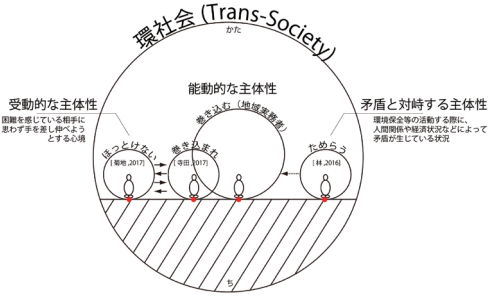
つぎに、わたしはどうであったか。何気ない会話が思わぬ謝罪という返答だったため取り繕おうとした。謝罪によるとまどいはあったものの、わたしはすぐに相手を「おもねる」態度で示した。「いえいえ、まったくうるさくないですよ」と。ここには、近隣住民との友好関係を維持していたいという想いの「利害的な態度」といえる。ただ、そのときのわたしは、主人との関係をそこまで打算的に考えているわけではないので、「感情的な態度」のほうが相応しいかもしれない。態度には、経験や学習によって、さまざまな想いが意識／無意識と相互に組み合わさり示される。

これらの態度の着想は、本書で寺田によって言及されているように総合地球環境学研究所の研究仲間の成果でもある。菊地の「ほっとけない」や林の「ためらい」、寺田の「巻き込まれ」をつうじたディスカッションによるものである［図1］。詳しくは本書の寺田の論考を参照していただきたい（pp.i-iv）。わたしは、これら個の価値観やそれに伴う情感、間柄による態度の関係を「環社会（Trans-society）」と呼ぶようにしている。「環社会」は、生物学者のユクスキュルをもとに生物の独自の知覚と行動で作り出す「環世界（Umwelt）」の内側にあるものと位置付けている。「環社会」は人の独自の知覚と行動と捉えていただいて差し支えない。また、風土を端的にいえば、地理学、鉱物学、天文学などに従事した三澤勝衛の捉え方がわかりやすい。三澤は大気と大地が一体として働きをもっているものを風土と呼んでいる（三澤、２００９、pp.41-42）。環世界は生物全般に言える見え方として、天と地という捉え方がここでは適しているであろ

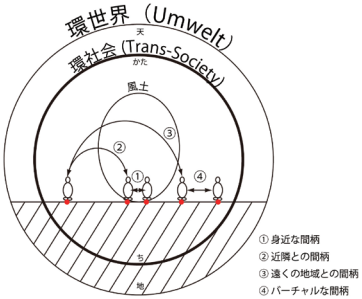
う。さらに、和辻が風土性で見られる現象であげた芸術について、多田道太郎は次のような表現で捉えている。

日本の芸事や作法は「かた」を通じて伝達されるが、その「かた」は「ち」と結びついて、はじめて「かたち」となる（多田、２０１４、p.121）。

ここで、図２を参照していただきたい。世界には生物から見た環世界という天と地の関係があり、その内側には人から見た環社会という「かた」と「ち」が存在する。風土はさらにその内側にある。こうした空間の中で、人は移動し、また間柄を築く。そこでは、①身近な間柄、②地域と地域による近隣との間柄、③日本と他国など遠くの地域での間柄、もしくは、④バーチャルな世界の間柄が考えられる。図で示されているつながりは、共進化（Co-evolution）に似ている効用があると考えている。



［図１］態度における「環社会」（「環社会」概念図バージョン１）
態度は、和語による言語（例えば、「もったいない」、「ほっとけない」、「ためらい」、「とまどい」、「かけあい」など）によって形成される。また、社会変革につながる態度は、「共感」や「納得」によって形成される。



［図２］環社会の間柄（「環社会」概念図バージョン２）
環社会における間柄は、人との関わり合いによって生じる態度の現れである。個人の経験や知恵によって関係性が異なってくる。また、矢印には、相手の理解が深まることで、「共感」や「納得」による「間柄の共進化」が育まれる。

共進化とは、複数の種が互いに生存や繁殖に影響を及ぼし合いながら進化する現象であり、これは、人との関係にも適応できる概念であろう。もともと生物学の研究結果からでてきた言葉でもあるため、ここでは、「間柄の共進化」と命名しておきたい。「間柄の共進化」とは、たとえば、困難な状況に対して、互いが会話をすることで影響を及ぼしながら解決する「共感」や「納得」という結果が導きだされることを指す。最近、これを間と混じる理という意味で「まとまり」という言葉で捉えている。つまり、間柄がまとまることで、共感や納得が形成される。漢字で書くと「間と混理」。字面に「まとまり」がないのが問題だ。

参考文献
小坂国継（１９８３）「研究論文７ 和辻哲郎と比較文化の問題」『比較思想研究』、比較思想学会誌、第10号、pp. 96-１０１
岩淵干明、田中国夫（１９７８）「社会的態度の構造的研究－態度構造研究の概観」『関西学院大学社会学部紀要』、関西学院大学社会学部、第37号、pp.89-99
和辻哲郎（２０１５）『風土 人間学的考察』、岩波文庫
ヤーコブ・フォン・ユクスキュル、ゲオルク・クリサート著（２０１０）『生物から見た世界』、日高敏隆、羽田節子訳、岩波文庫
三澤勝衛（２００９）『三澤勝衛著作集風土の発見と創造４ 暮らしと景観／三澤「風土学」私はこう読む』、農山漁村文化協会
多田道太郎（２０１４）『しぐさの日本文化』、講談社学術文庫

あとがき

対話の記録から知の源泉の統合へ

わたしたちが暮らす日本は、世界でいち早く人口減少社会に突入した。人口減少が顕著に見られる中山間地域では、地域内外から次世代の人材を定住させるために、新しい地域社会のあり方が模索されている。

研究者がフィールドに関わることは人それぞれ動機が異なる。とりわけ、実際に住んでいない地域で調査活動をすることは、親しい友人や協力者、地域での要望がない限り、きわめて困難であろう。また、すでに研究者や地域で活動する方がいる場合、新たに調査活動を実施することで先人が築き上げたつながりを壊しかねない。不安は募るばかりである。

はじめて怒田集落を訪れ、その帰り際に、氏原学さんが「何か楽しいことをやってくださいね」と言ったことがとても印象的だった。地域で「巻き込む」という力は、氏原学さんのような雰囲気で人と接する方にあるのだろう。このように思うことができるのも、石山俊さんの科研費「現代社会における篤農家の研究――特質と社会的役割の地域間比較（２０１５–２０１６）」に少し関わらせてもらえたことが大きい。本書のアイディアすべての源泉はここからはじまっている。

本書は、地球研が主催する第19回地球研地域連携セミナー（北海道）、北大・地球研合同セミナー「『農』の再発見　世界のフィールドから見えてくること」のフォローアップとして位置付けている。このセミナーでは、石山俊さんとの連名で発表した。石山俊さんが研究発表をまとめ、わたしが映像を作成した。その内容は、篤農家と呼べる安喰（あじき）健一さん（京都府綾部市で半農半そばによる暮らしをしている）一家の座談会の記録を紹介した。セミナーの総合討論会では「地域がよくなるには安喰さんが何人必要ですか」と質問された。そのときはとくに気にも留めなかった。

その後、平成29年度所長裁量経費（グループ研究）の研究助成が採択され、高知視察と研究会を実施した。研究会では、「聞き書きセミナー　地域に人をどう『巻き込む』か？」と題

して、地域実務者と研究者の対話型のセミナーを行なった。地域実務者には安喰健一さんや田畑勇太さん、さらに、長野の吉田修・弓夫妻を招いて行われた。地域実務者の活動がおもな内容であった。そこでも、「地域実務者は何人必要なのですか」と。石山さんとわたしは目を合わし、「北海道でも同じ質問があったね」と小声で石山さんが言った。

地域では、ある人がそこに存在することで、その地域がよくなるということがありえるのだろうか。セミナー後の帰路の途中、吉田夫妻を紹介してくれた対談相手の真貝理香さんを交えて、思わぬ方向へと会話がはずんだ。

三村　今日は北大セミナーと同じ質問があってびっくりしました

石山　安喰さんのような存在は、それだけ地域に必要なんだろうね

三村　2度も同じ質問があるってことは、けっこう重要なテーマなのかもしれないですね

石山　篤農家を研究してて、彼らのような人たちは地域での存在が大きい

真貝　それこそ、1アジキ、2アジキとか呼んでわかるようにして

三村　それいいですね。地域を支える人を科学的に証明して、新たな単位ができたらおもしろそう

石山　アフリカとかだった「アジーキ」みたいな発音になるかな。海外でも定着しそう

少し酔っていたこともあり、ニュアンスや言葉の誤りがあると思うが、大筋こんな感じだったと記憶している。「1アジキ」のように、人を単位にして地域活動の目安にする発想にはすぐ共感でき、知的好奇心がくすぐられた。元地球研プロジェクトリーダーの村松伸さんの言葉を借りれば「知の跳躍」の瞬間であり、知の統合が思わぬところで起こったのである。

フィールドぶらりを企画して6年目になる。対話の記録が今後重要だ、それを冊子として

残そう。わたしの無計画な動機がやっと芽吹き出したのかもしれない。知の統合はとても難しいようで、一方で、予期せぬところで、意図せずに統合する場合がある。それこそが、はじめにで書いた「学問を学問たらしめるもの」なのだ。本書で綴られた「宣言」のなかに、わたしの知らないところで知の統合が芽吹き出しているのだろう。知の源泉というのは、人との関わりの中で育まれることだと気づかされた。これからもコツコツと続けてゆきたいと思う。

最後に、いつもながら、本書の作成はギリギリのスケジュールであった。携帯を見ると、未原稿の状態でデザインを依頼したのは２０１８年２月のこと。年度末という忙しい時期にも関わらず、二つ返事で引き受けてくれた時代工房の柴田宣史さん、編集担当を引き受けてくれた黒木実奈子さん、心から感謝しています。また、本書作成および企画をサポートしてくれた窪田副所長や井上裕子さん、広報室員のみなさま、心よりお礼を申し上げたい。

三村　豊

プロフィール

石山　俊：国立民族学博物館（文化人類学、環境人類学）

ＮＧＯによる砂漠化対処活動現地駐在員としてアフリカ、チャドで４年間を過ごす。後、アフリカ乾燥地にて、農業を中心 とした生業活動とその現代的変容をテーマにしたフィールドワークと研究を開始。福井県中山間地への移住経験をきっかけに、「篤農家」の研究にも着手した。

市川 昌広：高知大学（地域研究、農村社会学）

東南アジア（おもにマレーシア）や高知県の農山村を取り巻く社会（森林・農業政策、都市の拡大、地域開発、環境問題など）が人々の暮らしに与える影響について研究。

氏原　学：ぬたたの会

高知県長岡郡大豊町怒田集落出身。高知大学の事務職を退職後、ふるさとの怒田にＵターンする。学生の授業や研究のフィールドとして怒田の地域再生に取り組む。

三村　豊：総合地球環境学研究所（建築学・建築史・都市史）

建築・都市史を中心に画像処理やＧＩＳを用いて研究に従事する。主にインドネシア・ジャカルタ都市圏を対象に、時系列 の都市の情報基盤構築を行う。ジャカルタ都市圏は、都市（コタ：kota）でもありかつ村落（デサ：desa）であるような地域（Desakota）が広域都市圏を形成しており、そうした都市構造が環境への負荷を軽減している可能性がある。都市の中の「隠された智恵」を古地図や地理情報をもとに明らかにする研究を行っている。

田畑 勇太：ＮＰＯ「ぬた守る会」

愛知県生まれ。限界集落発祥の地、高知県大豊町に４年前にＩターン。現在、妻と息子と三人で暮らし、農業を営んでいる。２０１７年２月に集落を持続させることを目的としたＮＰＯ「ぬた守る会」を発足させる。

寺田 匡宏：総合地球環境学研究所（歴史学、メタヒストリー）

歴史と記憶の関係や、歴史という人間中心の概念が非-人間を扱う環境とどう関係するかを研究。また、メタヒストリーという記述の立場から、超長期の過去であるアンソロポシーンと未来史についても研究。

能動／受動と環境主体性
（日本語要旨）

寺田　匡宏

「私」は言語によって定義される。同じ「私」でも、それを主体と言った時と、自我と言った時、その様態は異なる。近年、環境問題を巡って、これまで見逃されてきた主体のあり方に注目が集まっている。菊地直樹はコウノトリ野生復帰の現場で「ほっとけない」という受け身でありながら主体的な姿勢を見出し[菊地2017]、林憲吾は環境保護に半身で関わるという「ためらい」というありかたを建築・都市計画の現場から発見し[林2017]、寺田匡宏は「巻き込まれ」という状況へのコミットのあり方の特質を災害や開発にかかわる人類学の現場から抽出した[寺田2017]。それらは、哲学の國分巧一郎が注目する中動態とも通じる、受動と能動のはざまにあるあり方である[國分2017]。環境学研究においては、アンソロポシーン説の登場など、だれがこの地球の主体かという問題が問われている。それは、従来の、主体／客体の二分法を再考することを求める。その二分法とは、受動と能動を截然と区別する近代ヨーロッパ語の構築したものでもある。とするなら、受動と能動という区分のあり方を再考させる日本語における主体のあり方は、グローバルに見て地球環境学問題の解決にある一つのヒントを与えることになるのではなかろうか。

［引用文献］
菊地直樹 (2017)『「ほっとけない」からの地域再生学――コウノトリ野生復帰の現場』京都大学学術出版会
林憲吾 (2017)「環境保全をためらう理由」『平成 28 年度総合地球環境学研究所所長裁量経費報告書』総合地球環境学研究所
寺田匡宏 (2017)「援助の姿勢を考える――書評：石山俊『サーヘルの環境人類学』、清水貴夫『ブルキナファソ』」『Humanity&Nature』66
國分巧一郎 (2017)『中動態の世界――意志と責任の考古学』医学書院

world. Clear distinction of the subject enabled the modern civilization. However, a lot of problem is caused by it. Kokubun concludes that to overcome the problem caused by the modernity the middle voice should be reevaluated.

4. Lesson of the Environmental Subjectivity in the Epoch of the Anthropocene

In the environmental studies, the revision of subjectivity is necessitated. Especially a keen demand for alternative environmental narrative exists. Newly emerging geological term, the Anthropocene, requires a new perspective on the long past of more than 4.6 billion years which covers not only the human history but also the entire process of evolution and development of the globe. History is a process which is made by humanity under their subjectivity, but evolution and development of the earth system is a mere process of becoming. How do we narrate this long past? The emergence of the Anthropocene concept reflects critical situation of human/ nature relationship and it needs alternative view on the subject of the Earth; this is an ambiguous condition and to grasp this ambiguity, the revision of passive/active divide might play a key role. To re-define it as a new concept of environmental subjectivity might contribute to solve this contemporary environmental problem.

[References]

Hayashi, Kengo (2017). "Kankyohozen wo tamerau riyu (The reason why they hesitate to commit the natural conservation activity)", *Annual Report for RIHN Research Fund 2017*, Research Institute for Humanity and Nature, in Japanese.

Jonson, B. (ed.) (2011). *Freedom and Interpretation: The Oxford Amnesty Lecture,* 1992, New York; Basic Books, quoted in Lorraine Code, "Self, Subjectivity, and the Insituted Social Imaginary", in Shaun Gallagher (ed.), *The Oxford Handbook of the Self,* Oxford: Oxford University Press.

Kikuchi, Naoki (2017). *Hottokenai kara no shizen saisei gaku: kounotori yasei hukki no genba (Methodology on Reviving Nature from Veiw Point of Hottokenai: On the spot report of re-introduction of Stork),* Kyoto: Kyoto University Press, in Japanese.

Kokubun, Koichiro (2017). *Chudotai no sekai: ishito sekinin no kokogaku(Philosophical Inquiry into the Middle Voice: Archaeology of will and responsibility),* Tokyo: Igakushoin, in Japanese.

Shimizu, Hiromu (2003). *Hunka no kodama: Pinatubo aeta no hisai to shinsei womeguru bunka, kaihatsu, NGO (Echo of Volcanic Explosion: Suffering and Rehabilitation of Pinatubo-Aeta People and Its Culture, Development, and NGO),* Fukuoka: Kyushu University Press.

Shimizu, *Takao (2017).* *Burukinafaso: Bamu ken no seigyo, sabakuka taisyo, kaihatsu no monogurahu (Burkina Faso: A Monograph of Subsistence, Protection for Desertification, and Development in Bam District),* Kyoto: Research Institute for Humanity and Nature.

Terada, Masahiro (2017). "Enjo no shisei wo kangaeru (Rethinking the Regional Development)", *Humanity&Nature,* 66, in Japanese.

tamerai, when he/ she is asked to participate in the environmental activity like natural conservation. Although to conserve nature is good deed for them, they often hesitate to commit it from head to foot, because natural conservation or sustainable development and keeping life quality high seems to be incompatible. "I understand the importance of it, but… ." They often say. With saying so, they would like to commit. Such commitment with hesitation is the commitment in half body. Hayashi argues that such tendency is a typical phenomenon observed in Japanese society.

The third term *makikomare* is discussed by Masahiro Terada[5]. Terada discovered this term in the description of the anthropologist of natural disaster[6] and the anthropologist of regional development[7]. Both are involved into the vortex of problem; Luzon island, Philippine, the place of field work of the former was hit by the huge volcanic explosion of Mt. Pinatubo and the latter who did not intend to do field work of developmental anthropology was invited by local people into their activity. In their books they describe their commitment as *makikomare*, which means "being involved without intention". For them, what they did is not the result of their will, but a consequence of the matter of process.

What common in those three terms is the blurred subjectivity. When those terms are said, who did it and who decides it is not so clear; distinction between active and passive is clouded. This ambiguity is one of a characteristics of Japanese environmental subjectivity represented in Japanese language.

3. Problem of the Voice of Middle

As for the voice of active and passive, Koichiro Kokubun, philosopher and specialist of Spinoza and Derrida, inquires the meaning of the ambiguity between those two and re-introduces the voice of middle[8]. He found that in the practice of psychiatry, patient often says that he/she did not intend to do so, but he/she had to do so. To interpret such kind of loss of subject, the clear distinction between active and passive should be revised, he says. Instead of active/passive-divide, he features the concept of middle voice, which existed in classical Greek and Latin, but extinguished during the course of time in European modern language. In the middle voice, "subject is constructed as a subject in the process which the verb represents[9]." It is the process in which subject becomes its subject, namely subject exists inside the process of subject's becoming subject. The voice of middle and the voice of active was a pair in ancient time, and, at the time, distinction between the two was measured not by the criteria of "do and to be done", but by where does the process proceed, i.e. whether the process is transitive or intransitive. In ancient time, the will and responsibility differ from those of today. But, the middle voice declined in the middle age and the will, responsibility, and human subjectivity were fabricated in the Western

5 [Terada 2017]
6 [Shimizu 2003]
7 [Shimizu 2017]
8 [Kokubun 2017]
9 [Kokubun 2017:77]

7

Between Active and Passive

Japanese Language and Environmental Subjectivity in the Epoch of the Anthropocene[1]

Masahiro Terada

1. The "I" Constructed Culturally and Linguistically

The "I" is constructed. The "I" is constructed culturally. That the "I" is constructed culturally means that the "I" differs from culture to culture. The culturally differently constructed "I" is represented in different languages in different ways. This paper is written in English but even the "I" in English differs from place to place. The "I" is thought to be an equivalent to the "subject" in the place where influence of continental thought is strong, whereas in the places where American tradition is dominant the "I" is thought to be "self."[2] On the one hand, when we call the "I" the self, the term evokes collocations regarding self-determination, self-will, or free will, but, when we think the "I" as the subjectivity, on the other hand, it reminds us the term substance or object.

2. Who and What Made It?: Language and Ambiguous Japanese Environmental Subjectivity

Recently, in Japanese environmental studies, a new focus on culture, language, and subjectivity is emerging; the traditional term "*hottokenai*（ほっとけない）," "*tamerai*（ためらい）," and "*makaikomare*（巻き込まれ）" are given fresh meanings by various scholars.

Hottokenai is a term which was found by Naoki Kikuchi. In his book,[3] whose theme is the adoptive governance of wild life management and which investigates the reintroduction work of wild stork vanished in 1971, Kikuchi describes how local people take part in the activity of the revitalization of the specie. Being asked the reason why they participated in the action, local residents often say, "because *hottokenai*." *Hottokenai* in Japanese consists of three—or four—words; "*horu*," "*toku* (*te+oku*), " and "*nai*." It means literary that "I cannot leave it as it is," or "I cannot leave it in trouble." It is also translated as "it does not make me leave it as it is," or "I was made to commit by it." What most interesting is that the term *hottokenai* do not need the nominative. The phrase can be interpreted both in active and passive voice. Hence, when we hear this usage, the question of who does *hottokenai*, and what makes her/him *hottokenai* immediately emerges.

Similar term to *hottokenai* is *tamerai*, or hesitation. Kengo Hayashi argues the problematic of this word from view point of city planning or eco-friendly architecture[4]. According to Hayashi, Japanese people often say

1 This paper is presented at the research colloquium "Rethinking Environmental Praxis, Disciplinarity, and Subjectivity: New Perspectives on the Anthropocene in East Asia," held in Research Institute for Humanity and Nature in Kyoto, Japan, on 15 February 2018.

2 [Johnson (ed.)2011]

3 [Kikuchi 2017]

4 [Hayashi 2017]

フィールドぶらり 6「怒田」

超学際主義宣言——地域に人をどう巻き込むか？

2018年3月発行

編者　地球研若手研究員プロジェクト編

発行　総合地球環境学研究所
〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4
Tel.075-707-2100（代表）
FAX.075-707-2106（代表）
http://www.chikyu.ac.jp/

編集　三村 豊

制作　有限会社時代工房

印刷・製本　株式会社グラフィック

ISBN　978-4-906888-51-1